

ゲイリー・スナイダーと道元

—— 森と水の循環思想 ——

田 中 泰 賢

ゲイリー・スナイダー (Gary Snyder, 1930-) は、アメリカの詩人である。現在、カリフォルニア大学デービス校の英文科の教授として、アメリカ芸術院会員として、禅仏教の指導者として、そして国際的な環境保護運動家として積極的に活動している。若き頃、日本で十年近く、仏教修行にうちこんでいる。そして現在も、彼自らが建立した禅堂で修行を続けている。

一九七五年に彼はピューリッツァー賞を受賞している。受賞の対象になったのは、一九七四年に出版した『亀の島』(Turtle Island) という作品である。亀の島とは、アメリカ先住民が敬っている大地をさして彼らが呼んでいる名前である。この作品では、そのアメリカ先住民文化、仏教、そして環境問題等が混在したような内容になっている。彼は十五冊ほどの詩集およびエッセイ集を出版している。それらの全ての作品の根底には、アメリカ先住

民の文化、仏教思想、等々から生じた、或いはそれらと関連している自然、野生への敬いの態度、山河大地との共存意識、宇宙との一体感等々が流れているように思える。例えば、さきほど紹介した詩集『亀の島』には次のような作品がある。

PRAYER FOR THE GREAT FAMILY

Gratitude to Mother Earth, sailing through night and day-
and to her soil: rich, rare, and sweet
in our minds so be it.

Gratitude to Plants, the sun-facing light-changing leaf
and fine root-hairs; standing still through wind
and rain; their dance is in the flowing spiral grain

in our minds so be it.

Gratitude to Air, bearing the soaring Swift and the silent

Owl at dawn. Breath of our song

clear spirit breeze

in our minds so be it.

Gratitude to Wild Beings, our brothers, teaching secrets,

freedoms, and ways; who share with us their milk;

self-complete, brave, and aware

in our minds so be it.

Gratitude to Water: clouds, lakes, rivers, glaciers;

holding or releasing; streaming through all

our bodies salty seas

in our minds so be it.

Gratitude to the Sun: blinding pulsing light through

trunks of trees, through mists, warming caves where

bears and snakes sleep—he who wakes us—

in our minds so be it.

Gratitude to the Great Sky

who holds billions of stars—and goes, yet beyond that—

beyond all powers, and thoughts

and yet is within us—

Grandfather Space.

The Mind is his Wife.

so be it.

(1)
after a Mohawk prayer

この詩の最後のところに「モホーク (Mohawk) という言葉が使われている。これはアメリカ先住民の部族名である。モホーク族はニューヨーク州モホーク川流域を本拠地として生活している。文化水準は高く、十七世紀よりヨーロッパからアメリカに移住して来た人々に様々な形で接し、影響を及ぼし合った。モホーク族が唱えてきた大地への歌の心をスナイダーが受け継ぎ、新しい思想として詩の形にまとめたものである。

この詩は、「ありがたき 大地よ」から始まっている。この母なる大地は、私たちの心にも大地の如き、豊かき、尊ぶ、優しきがあることを気づかせてくれる。「ありがたき 草よ 木よ」で始まる第二スタンザでは、風に耐え、雨を養分として生長し、日光を命に変えていく植物の力を私たちの心は学んでいくのである。

第三スタンザでは「ありがたき 大気よ」、第四スタンザでは「ありがたき 野のけだものよ」と始まり、この二つのスタンザでは動物のさわやかな心が歌われている。第五スタンザの「ありがたき 水よ」、第六スタンザの「ありがたき 太陽よ」そして最終スタンザの「ありがたき 天よ」とあるように大地への感謝の念がくり返し唱えられている。

アメリカ先住民文化を題材としてこの詩ができてきているが、この詩の土台はアメリカ先住民文化とスナイダーが学んだ仏教思想の融合したものと思われる。彼の詩には仏教(華嚴、真言、淨土、禪等)に関する言葉や、或いは仏教思想を基礎にしたことが明らかな表現が随処に見られる。一九六〇年代よりスナイダーが唱え続けている環境保護活動の一環として、彼は道元の思想に注目している。

スナイダーは道元について二つの作品と一つの前がきで述べている。一つは、彼の詩集『波の観察』(*Regarding Wave*)である。この詩集に、“IN THE NIGHT, FRIEND” という詩作品があるが、その中に道元の言葉が引用されている第二スタンザは次のようである。

IN THE NIGHT, FRIEND

Fruit tree fields, orchards, Santa Clara, San Jose.

trailer parks in the lemon groves.

Seaman with a few extra bucks:

Talks of stocks, talks of taxes, buy up land.

the whole state of California

laid out like meat on a slab.

Growth and investment; development and returns.

—“I think them poets are all just charlatans.”

says Dogen, “every one of us

has a natural endowment

with provisions for the whole of his life.”^(c)

この詩に引用された道元の言葉は『正法眼蔵』「仏性」の巻の「釈迦牟尼言、『一切衆生、悉有仏性、如来常住、無有変易。』」のところに思われる。この詩には小金を持った男が登場し、株や税のことについて「ちやくちやくしゃべったり、土地を買い占めたりしている。“talks of” がくり返されることにより、株や税金に対する執着が暗示されている。また“buy up” という表現から人間の貪欲さがうかがえる。カリフォルニア全体が成長、投資、開発、利益一色になっている中で、この男の発する“charlatans” は人間の慢心を表わし、“then” は浅はかさを漂わせている。ここで、スナイダーはいきなり、道元の言葉を用いて読者をまじつかせているのは、この言葉を一種の公案として読者に提示

してゐるからで思われるのであつた。

次にスナイダーが道元であつてゐるのは、重松宗育が英訳出版した『A ZEN FOREST Sayings of the Masters of the 7th Century』の書物の Foreword をスナイダーはスノーニンジとわたつて書つてゐるが、道元でいつて次のやうな書づつてゐる。

The poets and the Chan masters were in a sense just the tip of the wave of a deep Chinese sensibility, an attitude toward life and nature that rose and flowed from the seventh to the fourteenth century and then slowly waned. The major Chan literary productions, *Wu-men Kuan*, *Ts'ung-jung Lu*, *Pi-yen Lu*, *Hsi-t'ang Lu*, are from the twelfth and thirteenth centuries. It was a second Golden Age of Chan and another era of marvelous poetry, one in which many poets were truly influenced by Chan. The most highly regarded Sung dynasty poet, Su Shih, was known as a Chan adept as well as poet and administrator.

Valley sounds:

the eloquent

tongue—

Mountain form:

isn't it

Pure Body? (284)

This is part of a poem by Su Shih. The Japanese master Dogen was so taken with this poem that he used it as the basis for an essay, *Keisai Sanshoku*, "Valley sounds, mountain form." Sung-dynasty Chan had a training system that took anecdotes and themes from its own history and lore and assigned them as subjects of meditation. The tradition that emphasized this, the Rinzai sect, is also called the Zen that "looks at sayings." The complementary school called Soto, which cut down on the use of old sayings, is also called "silent illumination Zen." They were both brought from China to Japan on the eve of the Mongol invasions. Japan inherited and added on to its own already highly developed sense of nature the world view of T'ang and Sung.⁽³⁾

禪の主要な作品『無門関』、『従容録』、『碧巖録』、『虚堂録』は十二、十三世紀に生まれた。この時代は禪の第二の黄金時代であり、またすぐれた詩が作られたが、多くの詩人たちが禪の影響を受けた。最も評価されていた宋代の詩人、蘇軾は、禪の居士として、詩人として、役人として知られていた。このようにスナイダーは説明した後、蘇軾の詩の一部を引用している。

溪声便是広長舌

山色無非清淨身

道元はこの詩に強く心をひかれて、『正法眼蔵』の「溪声山色」の巻の地下としてこの句を用いたのである。スナイダーが、道元の「溪声山色」を紹介したのは、道元の持つ深い文学の心に対する驚きとともに、スナイダー自身の詩人として、また思想家としてのあり方の強い確信、そしてエロロジ運動への意味づけを強めたからと思われる。この前がきを書いた一九八一年頃は、スナイダーの道元への理解が一段と深まっていることがうかがわれる。スナイダーが道元について述べている三番目の書物は、一九九〇年に出版した *The Practice of the Wild* である。この書物では一章を設けて、『正法眼蔵』の「山水経」を引用しながら野生と人間のあり方について述べている。その章のタイトルは「BLUE MOUNTAINS CONSTANTLY WALKING」と名づけられている。このタイトルは「山水経」の中で述べられている「大陽山楷和尚示衆云、『青山常運歩、』」を引用したものと思われる。道元の「山はそなはるべき功德の虧闕することなし。このゆへに常安住なり、常運歩なり。その運歩の功德、まさに審細に参学すべし。山の運歩は人の運歩のごとくなるべきがゆへに、人間の行歩におなじくみえざればとて、山の運歩をうたがふことなかれ。」と述べている言葉にスナイダーは注目したのである。何故ならば、山中に自ら建立した禅堂で毎日坐禅の修行を続けるス

ナイダーは山の運歩をうたがってはならないことを知っているのである。この書物の題名にある「The Practice」という言葉がそのことを端的に表わしている。

スナイダーは「山水経」から次の文章を引用している。

Blue mountains are neither sentient nor insentient.

You are neither sentient nor insentient. At this moment, you cannot doubt the blue mountains walking.⁽⁵⁾

この原文は、「青山すでに有情にあらず、非情にあらず。自己すでに有情にあらず、非情にあらず。いま青山の運歩を疑著せんことうべからず。」である(道元三三三)。スナイダーが「自己」を「You」と訳しているのは、自己を客観的にみようとすること態度の表われと思う。そこには青山、言い換えれば有情、非情を問わず一切万物から真言を聞こうとする敬虔さをくみとることができる。シューマッハー (E.F. Schumacher) は「現代人は自分を自然の一部とは見なさず、自然を支配、征服する任務を帯びた、自然の外の軍勢だと思っている。現代人は自然との戦いなどというばかげたことを口にするが、その戦いに勝てば、自然の一部である人間がじつは敗れることを忘れている。」と述べている。現代人は自分自身が自然の一部であることを忘れて、自然のバランスを破壊し続けている。このような時代において、「青山常運歩」と語る道元の思想はますます重要味を帯びてきているからこそ、スナイダーは引用したのである。

The mountains and rivers of this moment are the actualization of the way of the ancient Buddhas. Each, abiding in its own phenomenal expression, realizes completeness. Because mountains and waters have been active since before the eon of emptiness, they are alive at this moment. Because they have been the self since before form arose, they are liberated and realized. (PW, 97)

この原文は「而今の山水は、古仏の道現成なり。ともに法位に住して、究尽の功德を成ぜり。空却已前の消息なるがゆへに、而今の活計なり。朕兆未萌の自己なるがゆへに、現成の透脱なり。」である(道元 三三三)。「而今の山水は、古仏の道現成なり。」をスナイダーは「The mountains and rivers of this moment are the actualization of the way of the ancient Buddhas.」と訳している。このような思想はアメリカ人にとって、また現代日本人にとって常識からはずれたものと理解されるかも知れない。しかし、主観的な立場を離れて、山水の真如を悟ることは即ち自己を解脱することである。

飛岡健は「日本人のこころを培い、日本の文化・文明を築かせた川を初めとする自然を、日本人は自らの手で無自覚に破壊しつつあるように思えるのである。それは裏を返せば、日本人自らが、自らのこころや今日の文化・文明の礎を破壊しているのである。」

と述べている。「而今の山水は、古仏の道現成なり。」という言葉から、私たちの生命も、宇宙・大自然の様々な生命からなる生態系の一部であるということ、山水という大自然や生き物に対する敬虔な態度を取り戻さなければならぬことに気づくのである。

シューマハーは「資本の大部分は自然からもらうのであって、人間が造りだすのではない。ところが、人はそれを資本と認めようと思えない。そして、この自然という資本が今日驚くべき勢いで使い捨てられている。」と警告している。このような考え方はアメリカにおいても、スナイダーをはじめとする対抗文化(counter culture)運動において展開されていった。

「対抗文化運動が真に対抗的であったのは、この〈市場〉の背後に隠されていたものをあかみだしたからである。対抗文化運動のなかで、しだいに大きな潮流となったのが〈フェミニズム〉と〈エコロジズム〉の運動だったのは示唆的である。I・イリイチは、産業社会の市場を背後から支える「支払われない仕事」を「シャドウ・ワーク」とよび、その典型を家事労働に求めた(Mitch 1981)。フェミニズムが、これまで市場からは労働力の供給源として暗黙の前提にされていた家庭、その家庭内で家事の主要な担い手であり、市場からは隠された存在だった女性を問題にしたように、エコロジ運動は市場から隠されていた自然を問題にしたのである。これまで市場にとって、資源やエネルギーは無尺蔵であり、また廃物や廃熱の自然環境の自浄力は無限と考

えられ、それが産業社会の暗黙の前提になっていた。ところが、その結果たるや六〇年代後半から七〇年代前半にかけての公害問題やエネルギー問題の噴出にはかならなかつた。エコロジー運動は市場の外側にある自然の存在を強調し、市場中心の支配的文化を告発したのである。⁽⁸⁾

スナイダーはそのような立場から次のような詩を書いている。この詩は、ある晩、自殺した親友、ルー・ウェルチ (Lew Welch) の夢を見た後、書いたものという。

For/From Lew

Lew Welch just turned up one day,

live as you and me: "Damn, Lew" I said,

"you didn't shoot yourself after all."

"Yes I did" he said,

and even then I felt the tingling down my back.

"Yes you did, too" I said—"I can feel it now."

"Yeah" he said,

"There's a basic fear between your world and

mine. I don't know why.

What I came to say was,

teach the children about the cycles.

The life cycles. All the other cycles.

That's what it's all about, and it's all forgot.⁽⁹⁾

この詩の後半部で核心的なことが歌われている。「僕が言いに来たことは、／子供達に循環について教えることだ。／生命の循環。他の循環の全て。／これが全てなのに、全く忘れられている。」

私たちは自然界の水循環、生物の循環等々、様々な循環によって生かされている。この循環について山田国広は次のように述べている。「水は止まっても水なんですけども、水循環というものは、動いている。一回グルッと回ってくることによって循環が形成される。こういう思考方法というのは、現代科学では、切り捨てていった思考なんです。現代科学では物事を細分化して分析的にみて、それを寄せ集めれば総合化できるといふふうに考えている。これは間違いだと思ってます。そういう考えかたでは、現在起こっている地球汚染、あるいは環境汚染というのは見えてこない。物事には原因と結果がありますけども、そういう原因と結果というのは何重にも連鎖をつなげてみていく。これが水循環や生物循環の思想だと思うんです。循環の考えかたというのは、実は東洋には昔からあった。日本が影響を受けた仏教や道教の中にあつた。そういう考えかたを明治以後、日本は切り捨て、脱亜入欧でヨーロッパの考えかたを取り入れた。これこそが科学である、とやってきたことが、今の地球汚染を招いている。」⁽¹⁰⁾

スナイダーは詩において、また山田国広は科学者の立場から、おのおの循環思想の大切さを強調している。循環思想が正しく認識されることによって、自然環境および精神的環境がバランスを

もったものには正されるはずである。スナイダーは道元の「山水経」から次の言葉を引用している。

Wenzi said, "The path of water is such when it rises to the sky, it becomes raindrops; when it falls to the ground, it becomes rivers."

...The path of water is not noticed by water, but is realized by water. (PW, 101)

この原文は「文字曰、『水之道、上天為_三雨露、下地為_三江河。』」
「いま俗のいふところ、なほかくのごとし。仏祖の児孫と称せんともがら、俗よりもくちからんは、もともはづべし。』いはく、水の道は、水の所知覚にあらざれども、水よく現行す。水の不知覚にあらざれども、水よく現行するなり。」である(「」記号は筆者) (道元、三三六―三七)。「」の箇所はスナイダーの引用文から省略されている。この引用文についてスナイダーはこう述べている。「水循環という明らかな事実、及び山と川が実際お互いに形成し合っているという事実がある。水は山の高さによって早められ、流れ下る中で、地形を刻み、堆積させていく。そして沖台の大陸棚に堆積物の重みをかけて、終にはより一層の隆起を向けさせていくのである。」(PW, 101-02)

このように山と水は相互に形成し合い、循環していく。中国でも日本でも山水は自然を象徴していた。そして滞ることのない自然の循環の中で人々は生きてきた。山田国広も又、彼の著書『水

循環思考』の中で、親鸞の「自然法爾」や、道元の「山水経」にふれて、水循環について述べている。「鎌倉時代の禅宗の開祖、道元は『正法眼蔵』において、「いま目のあたりに見る山水には、古仏の道が実現している。その山水はともに本来の在り方において、山は山、水は水として表わすべきものを表わしつくしている。」水の流れるものとはかり考えるのは、流れるという言葉が、水をそしったことになる。なぜなら、もし見方を変えれば、水は流れないと強弁することにもなるのであるから。水は、ただありのままの真実のすがただけである。水のすがたが、そのまま水の功德である。けっして流れ去るだけではない。このように水に与っての流・不流を学び行ずるときに、万象を究めつくすことが、たちまちに実現するのである(「山水経」と語っている。道元は山についても「山は流る。山は流れず」と述べ、水の「流・不流」と同じく独特の表現をしているが、それは山水も人間も形を変えながら「循環」していることをいっているのではないかと、私は考えている。』

アメリカの詩人、スナイダーも、日本の科学者、山田国広が共にエコロジ活動をしながら、道元の「山水経」をはじめとする仏教思想に注目し、仏教思想を活用しているのは興味深いことである。スナイダーは更に道元の言葉を引用している。

Many rulers have visited mountains to pay homage to wise people or ask for instructions from great sages...

At such time these rulers treat the sages as teachers, disregarding the protocol of the usual world. The imperial power has no authority over the wise people in the mountains. (PW,100)

この原文は「帝者おほく山に幸して賢人を拝し、大聖を拝問するは古今の勝鬪なり。このとき、師礼をもてうやまふ、民間の法に準ずることなし。聖化のおよぶところ、またく山賢を強為することなし。」である(道元 三四〇)。この引用された文章も現代にとって重要なことを述べている。山水をはじめとする自然が、あたかもひとり人間の私有物であるかの如く、乱暴に扱われている。乱開発、汚染、多種多様な動植物の絶滅、等を見る時、あまりにも人間の無知なる行為を放っておくことはできない。指導者をはじめとして現代人は山水の声、動植物の声、賢人の声に耳を傾けなければならない。だから次の言葉をよく味う必要がある。

It is not only that there is water in the world, but there is a world in water. It is not just in water. There is a world of sentient beings in clouds. There is a world of sentient beings in fire.... There is a world of beings in a blade of grass. (PW,109)

この原文は「世界に水ありといふのみにあらず、水界に世界あり。水中のかくのごとくあるのみにあらず、雲中にも有情世界あり、

風中にも有情世界あり、火中にも有情世界あり、「地中にも有情世界あり。法界中にも有情世界あり。」一茎草中にも有情世界あり、「である(「)記号は筆者)(道元 三四〇―四二)。「)の箇所はスナイダーの引用文から省略されている。水の中にも、雲の中にも、風の中にも、火の中にも、地の中にも、存在世界の中にも、一茎の草の中にも、一本の杖の中にも自己の世界があることを知らなければならない。だから道元はこのように説いているのである。」古仏云『山は山、水是水』。この道取は、やまこれやまといふにあらず、山これやまといふなり。しかあれば、やまを参究すべし、山を参観すれば山に功夫なり。かくのごとく山水、おのづから賢をなし、聖をなすなり。」(道元 三四一)

(1) Snyder, Gary. *Turtle Island* (New Directions, 1974), pp. 24-5.
(2) Snyder, Gary. *Regarding Water* (New Directions, 1970), pp. 52-3.

(3) Snyder, Gary. Foreword. *A ZEN FOREST Sayings of the Masters*. Trans. Soiku Shigematsu. (Weatherhill, 1981), pp. ix-x.
(4) 『日本思想大系 道元』(海波書店 一九七〇年) 三三三頁。以下同書引用文では、道元と頁数を示す。

(5) Snyder, Gary. *The Practice of the Wild* (North Point Press, 1990), p. 105. 以下同書引用文では略語 PW と頁数を示す。

(6) E. F. シューマッハー、小島慶三・酒井懋訳『スモール イズ ビューティフル』(講談社、一九九〇年) 一九頁。

(7) 飛岡健『流れの思想 川と日本人の関係』(PH P 研究所、一

- 九八一年) 二二八頁。
- (8) シューマッハー、前掲書、二〇頁。
- (9) 鳥越皓之編『環境問題の社会学論 生活環境主義の立場から』(御茶の水書房、一九九一年) 五九頁。
- (10) Snyder, Gary. *AXE HANDLES* (North Point Press, 1983), p. 7.
- (11) 広松伝編『柳川堀割から水を考える 水循環の回復と地域の活性化』(藤原書店、一九九〇年) 九三―四頁。
- (12) 山田国広『水循環思想』(北斗出版、一九九一年) 四四頁。
- (たなか・ひろよし、アメリカ文学・思想、

愛知学院大学助教授)